

インタビュー 下野竜也が語る 読響との10年間

自分の役割、
貫き通せた

2013年4月から読響の首席客演指揮者を務めていた下野竜也がこの3月をもって退任する。2006年11月から2013年3月まで正指揮者のポストにあったので、計10年以上の長きにわたってともに歩んだことになる。下野が読響への思いを語った。

首席客演指揮者として最後となる3月は、大阪定期で始まり、鹿児島で終わるツアーでブルックナーの交響曲第7番を、東京芸術劇場と横浜みなとみらいホールではドヴォルザークの〈新世界〉を選びました。

ブルックナーの7番は、僕が鹿児島大学の学生オーケストラで学生指揮者として振ったことのある曲です。その後の大阪フィルハーモニー交響楽団での指揮研究員時代は朝比奈隆先生の、読響ではスクロヴァチェフスキ先生のブルックナーに接しました。朝比奈先生とスクロヴァチェフスキ先生のブル

ックナーは両極端ですよ。アプローチが違うが、どちらも素晴らしい。これがクラシックの醍醐味だいごみです。本当に近いところで勉強できたことが僕の宝です。

ドヴォルザークは、読響との関係の中で最も大切なレパートリーです。正指揮者の就任前、ヒンデミットとドヴォルザークを軸にプログラムを組んでいきたいと宣言して、ドヴォルザークの交響曲を全部演奏しました。一人の日本人指揮者が一つのオーケストラで全曲演奏したのは初めてでした。その最初に振ったのが〈新世界〉だったの



2011年3月19日公演での募金活動の様子

これからの読響に望むことは何でしょう。

読響での公約に掲げてできなかったことは二つあります。一つは、日本人の作曲家に委嘱した新曲をできるだけ再演することです。でも結局、池辺晋一郎先生と三善晃先生の作品しかできなかった。やはり繰り返して演奏していかねばならないと思います。

もう一つは、教育プログラムです。音大生や音楽家を目指そうと考えている学生の皆さんを招く「下野シート」は何度か実施しましたが、読響のメンバーと教育に関する事業にもっと取り組みたかったですね。日本人の指揮者なので、日本語で子供たちとか学生さんに訴えることもできたと思いますが、結果的に時間が限られていて十分できませんでした。読響という大オーケストラが、教育の面でも日本のオーケストラをリードしてほしい。そういう体力と実力があると思うのです。

(聞き手：事務局)

エフスキ先生にブルックナーを指揮すると言ったら、楽屋にスコアを持ってこいと。個人的にレクチャーを受けました。カンブルラン先生はレパートリーを一杯持っている。読響とどの曲をいつやるか、じっくり考えている。オーケストラの成長ぶり、マーケットを見て打ち出す、そのタイミングが絶妙ですよね。たとえばワーグナーの〈トリスタンとイゾルデ〉を経て、メシアンの〈アッシジの聖フランチェスコ〉へと。常任指揮者としてオーケストラを俯瞰すること、その見据え方がものすごく勉強になりました。

たまたま東日本大震災、熊本地震の直後の演奏会で、下野さんが指揮者でした。ステージ上での心のこもった挨拶も忘れられません。

東日本大震災が起きた直後の演奏会(2011年3月19、20日)は、計画停電の影響や、自粛ムードの広がり、演奏会を開くかどうか皆で真剣に議論しました。今、「音楽」にできることは何だろうと。決していいコンディションではなく、練習も1日取りやめになったけれども、演奏会はやろう、いい演奏会にしようと決め、楽員もスタッフもみんなで一致団結しました。その後も、被災地で演奏会をしましたし、こういうことを大切にしている集団だということが、僕にとっても誇りでした。今でも心に残っています。

思う曲のストックがあって、ここぞというときに組み合わせて提案していました。新しい曲は一から譜読みしないといけないから、楽員さんには負担をかけたと思いますが。今演奏しておかないと忘れ去られる、将来のためにも今この曲をやらなければならないという使命感というか、懸念する気持ちもありましたね。僕と読響が取り上げたから、また数年後、誰かが演奏してくれる。埋もれたままにはならない、という役割の一端を担えたのではないかな。

この10年で読響はどう変わったのでしょうか？

身内の僕でさえ随分変わったと思うから、お客様にもはっきり分かるのではないのでしょうか。緻密なアンサンブルは常任指揮者がアルプレヒトの時代からですが、スクロヴァチェフスキ時代に、より折り目正しく一寸たがわずできるようになり、カンブルラン時代には柔軟性が相当上がったと思いますよ。僕はオーケストラを笑いで明るくした、というのが唯一の功績です(笑)。日本人の指揮者が読響でポジションを持っていたことは、調整役にもなったかなと思います。

僕は4月から広島交響楽団の音楽総監督に就任しますが、この10年、常任指揮者の背中を見てきました。いいお手本が目の前にいた。スクロヴァチ

です。でも、前半はひねったプログラムでしょう。ヴァイオリニスト三浦文彰さんとの共演なので「真田丸やらないの？」とも言われたのですが(笑)。

知られざる名曲に挑みました。

首席客演指揮者時代に印象を残せたかなと思うのは、フィンジの合唱曲〈靈魂不滅の啓示〉(2016年4月14日)やジョン・アダムズの〈ハルモニーレーレ〉(2015年10月13日)、カレル・フサの〈この地球を神と崇める〉(2014年9月16日)です。珍しい曲をただやるだけなら意味がないですね。お客様にとっても喜ばれたし、いいものをお届けすることができたと思います。僕の役割は、常任指揮者のプランがまずあり、ゲストの指揮者もそうそうたる方がいて、その隙間というか……読響はバラエティに富んだプログラムを演奏できることをアピールするという、自分の役割を最初から最後まで貫き通せて良かったと思います。もちろんウィーンの古典のような、正統的なプログラムも、自分の試金石として取り組みました。

「読響のゲテモノ担当」と自称されていましたが、珍しい曲をどうやって探し出すのでしょうか。

休みの日にCDショップへ行行って手当たり次第に買ったりしましたし、テーマを決めて聴いてみて、「これは面白い」とか。いつかできるといいなと

指揮者下野竜也と読響の軌跡

寺西基之



下野竜也 ©読響

下野が正指揮者になるという話を聞いた時、彼ならば何か特別なことをやってくれそうだったものだったが、実際読響での彼の活動は、筆者のそうした期待をもはるかに上回るような、めざましいものがあった。ここでは10年あまりにわたる読響指揮者としての彼の活動を振り返ってみよう。

正指揮者として打ち出した革新的なプログラム

下野竜也はもともとから一般に演奏されない作品に光を当てることに積極的だったが、果たして正指揮者に就任して以降、次々と珍しい作品を取り上げ、読響のレパートリーを飛躍的に広げることになった。就任して初めての《定期演奏会》(2006年11月)で、いきなりコリリアーノの交響曲第1番をメイン曲としたことからして、そうした

彼の意気込みが感じられよう。そして2007年1月からドヴォルザークの交響曲全曲シリーズを開始し、これを2012年5月に完結させている。しかもこれは定期ではなく、《名曲シリーズ》を中心になされている。後期の交響曲ならともかく、ほとんど演奏されないドヴォルザークの初期・中期の交響曲を、本来はよく知られた曲目によるプログラムが組まれる《名曲シリーズ》等の系列で取り上げたところに、下野&読響の本気度が窺われたものだ。

そして、このドヴォルザーク・シリーズと並行して下野が《定期》でシリーズとして組んだのが、“下野プロデュース・ヒンデミット・プログラム”だった。ヒンデミットという作曲家は日本では人気がなく、オーケストラの演奏会ではかろうじて《画家マチス》が演奏されるくらいだが、下野は《画家マチス》は勿論のこと、大作《前庭に最後のライラックが咲いたとき》をはじめ、《シンフォニア・セレーナ》《管弦楽のための協奏曲》《チェロ協奏曲》ほかを取り上げ、日本の聴衆にヒンデミットを認知させる大きな役割を果たした。ヒンデミットがワーグナーの《さまよえるオランダ人》序曲を面白おかしくパロディ化した曲では、ちょっとした演技と演出を加えた下野のアイデアが面白かった。

ともかく下野の振る時のプログラムは斬新なものが目に付いた。それは2006年度まで常任指揮者を務めていたアルブレヒトの路線を彼なりの視点で受け継いだものといえるかもしれない。現代作品に積極的というところもアルブレヒトと共通する点で、就任時にコリリアーノの交響曲第1番を選んだことはすでに触れたが、以後も《ザ・マンハイム・ロケット》《ハーメルンの笛吹き幻想曲》《音楽に寄せて》《レッド・ヴァイオリン》などのコリ

リアーノ作品を取り上げ、またテリヘンのティンパニ協奏曲、ジョン・アダムズの《ドクター・アトミック・シンフォニー》、HKグルーバーの《フランケンシュタイン!!》ほかを振っている。日本の作品では伊福部昭の《ロンド・イン・ブレスク》、芥川也寸志の《エローラ交響曲》、黛敏郎の《涅槃交響曲》、團伊玖磨の交響曲第6番《HIROSHIMA》といった歴史的な作品を振り返る一方、細川俊夫の《ダンス・イマジネール》、山根明季子の《ヒトガタ》、藤倉大の《アトム》、池辺晋一郎の《多年生のプレリュード》などの読響委嘱作品の世界初演を受け持っている。

正指揮者時代の下野の最大のハイライトが、2012年秋の読響と日生劇場と東京二期会の共催によるライマンのオペラ《メデア》の日本初演だろう。複雑なスコアを見事に纏め上げたその指揮ぶりはまさに驚嘆すべきものがあった。



《第506回定期演奏会》ヒンデミット／《「さまよえるオランダ人」への序曲》での寸劇の様子(2011年7月19日) ©読響

り、この公演は2012年度の文化庁芸術祭大賞に輝いている。

首席客演指揮者時代のさらなる挑戦

2013年度から首席客演指揮者の立場で読響に関わるようになった下野は、立場上、登場回数は少なくなったものの、正指揮者時代の路線をさらに研ぎ澄ませていくような活動をみせていく。初年度の白眉となったのは前年の〈メデア〉に続くライマンのオペラ〈リア〉で、〈メデア〉同様にこの難曲の公演を成功に導いた下野の手腕が再び絶賛された。ドヴォルザークの〈レクイエム〉やヒンデミットの〈白鳥を焼く男〉が入っているのは、正指揮者時代の二つのシリーズの補完ともいえ

ようが、特に注目すべきはフサの〈この地球を神と崇める〉(日本初演)、フィンジの〈靈魂不滅の啓示〉という二つの声楽入りの作品である。それぞれ性格も内容も全く異なるものながら、先の見えない今の混迷の時代における下野の切実なメッセージが、この二つの秘曲の選曲に示されていた。特にこのフサ作品を取り上げた公演は、松村禎三の〈ゲッセマネの夜に〉、モーツァルトのピアノ協奏曲第24番ハ短調、バッハ=ストコフスキーの〈ゲッセマネのわが主よ〉を前に置くという絶妙なプログラム構成を通して、聴衆にこの公演に込めた痛切な意味合いを訴えかけていたことも特記しておきたい。

そうしたシリアスな選曲とは対照的だった公演の例が、2014年1月のプロである。前半はバッハの四つの曲をそ

れぞれオネゲル、レーガー、ホルスト、ラフが管弦楽編曲したものを並べ、後半は〈展覧会の絵〉を通常のラヴェル編曲版ではなく、それ以前に作られたヘンリー・ウッド編曲で取り上げるといいかにも下野らしいひねったプロで、特にこのウッド版〈展覧会の絵〉はまるで漫画のごときコミカルな音描写が満載、おおいに会場を沸かせたものだ。

正統派指揮者としての下野竜也

こうした秘曲や珍曲を選曲することについて、下野自身は「読響のゲテモノ担当」という冗談めいた言い方をよくしていた。しかし、彼は決してただむやみに珍曲を取り上げていたわけではない。しっかりした審美眼をもって世に紹介すべき作品を選び出し、上にも例を挙げたような考え抜かれた曲目構成の綿密な企画のもと、優れた指揮技術と表現力でもってその真価を伝えることで、それら「ゲテモノ」が実はゲテモノどころか、隠れた名曲であることを明らかにしてきたのである。

そしてまた、下野は決して「ゲテモノ担当」だけだったわけではない。特に正指揮者時代にはきわめて多くの演奏会を指揮し、オーソドックスな名曲も実にたくさん手掛けている。それこ

そ〈運命〉〈未完成〉〈新世界〉といったポピュラー作品をはじめ、ベートーヴェン、メンデルスゾーン、シューマン、ブルックナー、マーラーといった王道をいくレパートリーや近現代の名作に至るまで、在任中に取り上げたレパートリーの幅広さは驚くものがある。

そしてどんな有名曲でも常に真摯に作品に向かい合い、少しも手を抜くことなく正面きったアプローチによるきわめてレベルの高い演奏で聴衆を魅了してきた。そうした正統派指揮者としての誠実な姿勢あってこそ、「ゲテモノ」プロもまた支持されてきたのだろうし、実質的に常任指揮者に匹敵するほどの存在感でもって、読響の歴史に大きな足跡を遺したといえるだろう。

そして、下野自身も読響との10年あまりの仕事を通して一段と成熟味を加えてきた。読響という優れたオケを相手にじっくりと自身の音楽的アイデアを実現・実践できたことが彼の音楽に深化をもたらしたことは間違いなく、最近の彼の表現には以前よりさらなる深い踏み込みが感じられる。こうした読響での貴重な経験は、この4月からの彼の広島交響楽団音楽総監督という新たなポストで存分に生かされることになるだろう。今や大指揮者としての風格も漂う下野竜也の今後の活躍に期待したい。

(てらにし もとゆき・音楽評論)



《第574回サントリーホール名曲シリーズ》フサノ〈この地球を神と崇める〉
合唱：上野学園大学合唱団(2014年9月16日) ©読響

心に残るクラシック

猪木武徳 ——②

Takenori Inoki

二つの楽器の掛け合いの面白さ

J. S. バッハ：二つのヴァイオリンのための協奏曲 BWV.1043



バッハの〈二つのヴァイオリンのための協奏曲 ニ短調〉にはちょっとした思い出がある。わたしの友人に、そろってヴァイオリンが上手い夫婦がいる。夫は優れた工学者、その分野では尊敬されるような仕事をしてきた研究者だ。二人は大学時代に学生オーケストラで知り合い、ゴールインした。半世紀近くも昔のことである。結婚式のあとの披露宴では、もちろんお二人得意のヴァイオリン演奏があった。演目はバッハの〈二つのヴァイオリンのための協奏曲〉である。伴奏は、彼らの知り合いのセミプロのピアニストだ。

ところが、演奏が始まってしばらくすると、緊張感と嬉しさがなくまぜになったせいか、第一ヴァイオリンと第二ヴァイオリンがうまく咬み合^かわなくなってきた。バッハのフーガの面白さが、「何か合っていないな」と誰の耳にも明らかになるやいなや、演奏はすぐピタリと止まり、新郎新婦が言い合い

を始めた。^{あいきょう}ご愛嬌の素人芸であるし、おめでたい場の音楽だからということに気付いたのか、言い合いは幸い笑いでおさまった。喧嘩にはならなかったが、将来を予感させるような光景であった。

この協奏曲はバッハ特有のフーガの構成になっているため、第一楽章は独奏の第二ヴァイオリンが、ヴィオラと通奏低音に支えられながらニ短調の動機をまず高らかに奏でる。続いて第一ヴァイオリンが5度上のイ短調に転調された動機を歌うのである。フーガ的構成であるから、どちらが上でも、優位でもない。まさに複数の声が平等にそして独立に、しかし和声的な調和を保ちながら進行する。第一ヴァイオリンの方が第二より強くなる必要もない。いや強くなつてはならないのだ。張り合うより、力を合わせるという意味では、結婚式に打ってつけの曲かもしれない。



《第522回名曲シリーズ》モーツァルト／協奏交響曲 指揮：マリン・オルソップ、ヴァイオリン：ライナー・ホーネック、ヴィオラ：鈴木康浩（2010年1月27日）©読響

お二人との付き合いは現在も続いているが、相互批判の精神も依然旺盛^{おうせい}に、しかしたいへん仲良く過ごしておられるのを見るにつけ、音楽がお二人をいまだ強く結びつけているようではほえましく感じる。もっとも、二人が同じ楽器だということもあり、一緒に演奏することはほとんどないという。夫人は友人たちと室内楽を楽しんでいるが、彼の方は研究生生活の忙しさもあってか、演奏技術が劣化の一途をたどり、誰からも合奏の誘いがかからなくなったそうだ。

ダブル・コンチェルトといえば、モーツァルトの〈協奏交響曲〉もわたしの大好きな作品だ。特にヴィオラが味わい深い役割を果たしている。大昔、米国タングルウッドの音楽祭で、芝生に寝転がりながら「夢かまことか」と思うほどの気分で聴き入ったことがあ

った。このダブル・コンチェルトの魅力の理由のひとつは、（モーツァルトが好きな）渋いヴィオラと、晴れやかなヴァイオリンの掛け合いにあるのだが、特に二つの弦楽器の共鳴によって独特の厚みのあるハーモニーが生み出されていることにもある。あの靈妙なハーモニーは、ヴィオラの弦をすべて半音ずつ高く張り、ニ長調のパート譜で演奏する「仕掛け」から生まれる、とくだんの友人ヴァイオリニストから説明されたことがある。

他にも、ブラームスの〈ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲イ短調 op.102〉など、ダブル・コンチェルトは聴いても観ても面白い。オーケストラと独奏者だけでなく、独奏者同士の掛け合いにより、鑑賞する側の楽しみが一層増すからだ。

◎コンサートマスター

長原幸太

Kota Nagahara

サッカーで言えば司令塔
すべての音を聴き逃しません

《3月は下野竜也さんが大阪から鳥取、福岡、鹿児島で、ブルックナーの交響曲第7番などを振り、長原さんがコンサートマスターを務めます》

かつてコンサートマスターだった大阪フィルハーモニー交響楽団で朝比奈隆先生がブルックナーを得意とされていたし、下野先生も大阪フィルの指揮研究員でした。大阪のお客様は楽しみにしているのでは。最後の鹿児島は下野先生の出身地だし、いいツアーになるでしょう。下野先生は、楽譜に忠実に、音楽を作っていく。最近はさらにスコアを読み込んできていると思います。よく知られた曲も、気づかなかったこと、目をつぶってきたことに光を当てる。ご多忙にもかかわらずその勉強ぶりには感心させられます。

《ブルックナーの交響曲は演奏者にとってどんな曲でしょう》

ブルックナーは大好きです。トレモロが多いのでよく、「弦楽器は疲れませんか？」と言われますが、その先に

何かが見えるような気がする。「最後のトレモロも絶対にしっかり弾く」をモットーにしています。チェロとコントラバスが低音をしっかり支える中、ヴァイオリンを合わせると幸せ一杯。それにホルンとかワーグナーチューバが荘厳な響きを出すと、もう何時間でも聴いていたい(笑)。

《長原さんは広島生まれ。母の影響で4歳からピアノを始めたが、5歳でヴァイオリンに。たちまち上達し、小学6年、中学1年で相次いで全日本学生音楽コンクールで1位。芸大附属高校3年で日本音楽コンクール優勝、一躍注目を浴びた》

小学5年生の時、大阪の小栗まち絵先生に教えてもらい、こんな凄い人があるんだと衝撃を受けました。広島から大阪までレッスンに通い、音楽の道で生きようと思うようになりましたね。性格がやんちゃで負けず嫌いなものだから、高校1年生の時、バスケットで2度腕の骨を折った。頑張りすぎちゃって。とくに左上腕の骨折は重症でギプスを外すのに1か月半、治るのに5か月ほどかかった。さすがに人生を考え直さねばと思いましたよ。大学ではもっぱら演奏活動。ソリストを目指して、オーケストラは眼中になかったの



ですが、プロのオーケストラをゲストで経験してみると、さすがに皆上手い。大阪フィルでショスタコーヴィチの交響曲第7番〈レニングラード〉を演奏して、凄くカッコいい、オーケストラも悪くないと思っていた矢先、大阪フィルにコンサートマスター契約を求められたんです。大阪は小栗先生^{ものお}の地元だったし、肌が合いました。物怖じしない性格だったからこそ、ベテランの楽員ばかりの中でコンマスが務まったのでしょうか。

《読響に入団してもう3年目です》

読響は、プログラムが豊富ですね。それだけに準備に時間がかかります。指揮者、ソリストも凄い人が多いから、やりがいがあります。リハーサル

の雰囲気も凄く明るい！ どんな演奏会も手を抜かないオーケストラですが、時に勢いで押し切っちゃうのが欠点かな(笑)。

《コンサートマスターの心得とは》

リハーサルでは、すべてを聴き逃さないよう心掛けています。指揮者の一語一句。楽員の質問、指揮者の答え。他のパートの音もすべて。指揮者の言うことが楽員に伝わっていないと思うことがある。そんな時は間に入って、僕なりのイメージを伝えるようにする。聴き漏らしていたら何も言えませんか。コンマスは、サッカーで言うところの司令塔みたいなものです。監督は指揮者だが、自分で音を出すわけではない。音を出すのは我々の仕事。テンポを遅くするか速くするか、こっちの都合がある。指揮者と話して楽員との調整を図ることもしばしばです。

《来月から読響創立55周年記念のシーズンプログラムが始まります》

カンブルランが振るメシアンの〈アッシジの聖フランチェスコ〉、首席客演指揮者に就任するマイスターのマーラーなど、例年にも増して豪華で多彩ですね。それはいいけど、大変なプログラムばかりだから、体調を整えて臨まないと(笑)。ヴァイオリニストとしてはゴドン・クレメル、イザベル・ファウストが気になります。読響の新しい挑戦をぜひお楽しみ下さい。

新シーズンはカンブルラン指揮〈巨人〉で、華麗に開幕！

4/8 (土) 14:00 第196回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

4/9 (日) 14:00 第196回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ハイドン：交響曲 第103番〈太鼓連打〉

マーラー：交響曲 第1番〈巨人〉

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）



シルヴァン・カンブルラン

ドラマティックに描かれるバルトークの魅惑的で耽美な世界

4/15 (土) 18:00 第567回 定期演奏会
東京芸術劇場コンサートホール

メシアン：忘れられた捧げもの

ドビュッシー：〈聖セバスティアンの殉教〉交響的断章

バルトーク：歌劇〈青ひげ公の城〉(演奏会形式)

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

ユディット：イリス・フェルミリオン (Ms)

青ひげ公：バリント・ザボ (Br)

※ 2017年度の定期演奏会はサントリーホールの改修工事に伴い、
4～9月は東京芸術劇場で開催します。



イリス・フェルミリオン



バリント・ザボ

ウィーンの俊英が初登場&ショパン・コンクールの覇者が共演

4/21 (金) 19:00 第601回 名曲シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

4/23 (日) 14:00 第95回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ウェーバー：歌劇〈魔弾の射手〉序曲

グリーグ：ピアノ協奏曲

ドヴォルザーク：交響曲 第7番

指揮：サッシャ・ゲッツェル

ピアノ：ユリアンナ・アヴデーエワ

※ 2017年度の名曲シリーズはサントリーホールの改修工事に伴い、
4～9月は東京芸術劇場で開催します。



サッシャ・ゲッツェル



ユリアンナ・アヴデーエワ

4月 公演の聴きどころ

創立55周年となる2017年度シーズンが幕を開ける。4月8、9日の《マチネーシリーズ》では、常任指揮者カンブルランが二つの交響曲をお届けする。ハイドンの交響曲第103番〈太鼓連打〉は、第1楽章で炸裂するティンパニの連打が印象的。後半はマーラー作品の中でも人気が高い、若書きの交響曲第1番〈巨人〉。古典と近代の交響曲をカンブルランがどのように対比して聴かせるのか、期待が高まる。また〈巨人〉では、恋愛への憧れや失恋の苦悩など、多感な青年期の葛藤と揺れ動く感情を、カンブルランのタクトが鮮烈に描き出すだろう。

15日の《定期演奏会》では、カンブルランがバルトークによる20世紀オペラの傑作〈青ひげ公の城〉(演奏会形式)を披露。ウィーン国立歌劇場やミラノ・スカラ座で活躍する歌姫フェルミリオン(メゾ・ソプラノ)、2016年にハンプルク国立歌劇場での青ひげ公役を絶賛されたばかりのザボ(バリトン)が共演する。シュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督を務め、オペラの指揮でも経験の深いカンブルランが実力を発揮し、ドラマティックに物語を展開するだろう。その前半には、メシアンとドビュッシーを並べる。2017年はメシアン没後25周年にちなみ、カンブルランが来日するごとにメシアン作品を取り上げていく。今回の〈忘れられた捧げもの〉は第2弾。メシアン演奏のスペシャリスト、カンブルランならではの冴えた感覚にご注目を。

21日の《名曲シリーズ》、23日の《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》では、ウィーン・フィルのヴァイオリン奏者を務めた後、指揮者として活動している注目株のゲッツェルが読響と初共演する。ボヘミアの民俗音楽的な語法とロマンティックな感情が融合しているドヴォルザークの交響曲第7番などを、思い切りの良い大胆な解釈で聴かせてくれるだろう。グリーグのピアノ協奏曲では、ショパン国際コンクールでアルゲリッチ以来の女性奏者として優勝し、一躍人気者となったアヴデーエワが共演。北欧のさわやかな叙情あふれる傑作で、華麗な技巧と瑞々しい音色をご堪能いただきたい。

(文責：事務局)

読響チケットWEB

検索

東欧の巨匠レナルトが久々に登場し、〈英雄〉などを指揮

5/13 (土) 14:00 第197回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

5/14 (日) 14:00 第197回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ショパン：ピアノ協奏曲 第1番
ベートーヴェン：交響曲 第3番〈英雄〉
指揮：オンドレイ・レナルト
ピアノ：ケイト・リウ

※当初発表の指揮者から変更となりました。



オンドレイ・レナルト



ケイト・リウ

名誉指揮者ロジェストヴェンスキーが振るブルックナー第5番

5/19 (金) 19:00 第568回 定期演奏会
東京芸術劇場コンサートホール

ブルックナー：交響曲 第5番 (シャルク版)
指揮：ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー (名誉指揮者)

※当初発表の指揮者から変更となりました。



ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー

“ハーブの貴公子”メストレが名曲〈アランフェス〉で聴衆を魅了!

5/26 (金) 19:00 第602回 名曲シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

5/27 (土) 14:00 第96回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

5/28 (日) 15:00 第5回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

芥川也寸志：弦楽のための三楽章〈トリプティック〉
ロドリゴ：アランフェス協奏曲 (ハーブ版)
ブラームス：交響曲 第1番

指揮：尾高忠明 (名誉客演指揮者)
ハーブ：グザヴィエ・ドゥ・メストレ



尾高忠明



グザヴィエ・ドゥ・メストレ

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390
(10:00~18:00/年中無休)
ホームページ・アドレス <http://yomikyo.or.jp/>

新鋭ブレンドウルフが〈シェエラザード〉で描く幻想的な物語

6/11 (日) 14:00 第97回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

6/13 (火) 19:00 第603回 名曲シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

シベリウス：交響詩〈トゥオネラの白鳥〉
ショスタコーヴィチ：チェロ協奏曲 第1番
リムスキー=コルサコフ：交響組曲〈シェエラザード〉
指揮：ダニエル・ブレンドウルフ チェロ：宮田 大



ダニエル・ブレンドウルフ

ウィーン国立歌劇場などで活躍する女性指揮者ヤングが初登場!

6/17 (土) 14:00 第198回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

6/18 (日) 14:00 第198回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ワーグナー：歌劇〈さまよえるオランダ人〉序曲
ブルッフ：ヴァイオリン協奏曲 第1番
ブラームス：交響曲 第2番
指揮：シモーネ・ヤング ヴァイオリン：ネマニャ・ラドウロヴィチ



シモーネ・ヤング

日下紗矢子がリーダーを務め、シュербルト〈死と乙女〉を演奏

6/19 (月) 19:30 第14回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00から解説

《日下紗矢子リーダーによる室内合奏団》
ショスタコーヴィチ (バルシャイ編)：室内交響曲 へ長調 作品73a
シュербルト (マーラー編)：〈死と乙女〉(弦楽合奏版)
ヴァイオリン：日下紗矢子 (読響コンサートマスター)



日下紗矢子

アルプスの大自然の夜明けから日没までを描いた大作を披露

6/24 (土) 18:00 第569回 定期演奏会
東京芸術劇場コンサートホール

6/26 (月) 19:00 第17回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール(大阪)

プロコフィエフ：ピアノ協奏曲 第3番
R.シュトラウス：アルプス交響曲
指揮：シモーネ・ヤング ピアノ：ベフゾド・アブドゥライモフ



ベフゾド・アブドゥライモフ

読売日本交響楽団《皇帝》&《悲愴》

■3/26(日) 14:00 ウェスタ川越

指揮：円光寺雅彦

ピアノ：仲道郁代

ベートーヴェン／ピアノ協奏曲 第5番〈皇帝〉

チャイコフスキー／交響曲 第6番〈悲愴〉

[料金] S ¥5,500 A ¥4,500

[お問い合わせ] ウェスタ川越 049-249-3777

芸劇&読響「春休みオーケストラコンサート」

■3/29(水) 11:30/13:30 東京芸術劇場コンサートホール

指揮：円光寺雅彦

メゾ・ソプラノ：山下牧子 ナビゲーター：中井美穂

グリンカ／歌劇〈ルスランとリユドミラ〉序曲

ビゼー／歌劇〈カルメン〉からハバネラ“恋は野の鳥”

モーツァルト／歌劇〈フィガロの結婚〉から“恋とはどんなものかしら” ほか

[料金] S ¥3,500 A ¥2,500 子ども(3才以上小学生まで) ¥1,000

※11:30開演…0才から入場できます。2才児まで保護者のひざ上の場合には無料(ただし、保護者1名につき子ども1名まで)。

13:30開演…4才から入場できます。全て有料となります。

[お問い合わせ] 東京芸術劇場ボックスオフィス 0570-010-296

SEKISUI presents 辻井伸行×服部百音 究極の協奏曲コンサート

■4/25(火) 19:00 仙台・イズミティ 21

4/26(水) 18:30 盛岡・岩手県民会館

4/29(土・祝) 14:00 よこすか芸術劇場

4/30(日) 14:00 所沢市民文化センターミューズ アークホール

5/ 1(月) 14:00 東京オペラシティ コンサートホール

5/ 2(火) 19:00 東京オペラシティ コンサートホール

指揮：ニール・トムソン

ピアノ：辻井伸行 ヴァイオリン：服部百音

ショスタコーヴィチ／ヴァイオリン協奏曲 第1番

ショパン／ピアノ協奏曲 第1番 ほか

※ 料金・お問い合わせ先の詳細は、

オフィシャルサイト(<http://avex.jp/classics/kyukyoku2017/>)をご覧ください。